



考古学実習Ⅲ(LB)では例年、韓国伝統文化大学校・李基星教授の指導のもと、松菊里遺跡(青銅器時代)の調査に参加してきました。本年度は出土遺物の整理作業を行い、扶余周辺、およびソウルの遺跡・博物館を見学しました。

目次

■ 合同企画展「京(みやこ)の山寺 なぜ人は山にのぼるのか」の開催	2
■ 茶道資料館での実習を通して学んだこと	4
■ 学芸員課程報告	6
■ 七尾市教育委員会スポーツ・文化課文化財復旧保全対策室に勤務して(立花唯翔)	8

合同企画展「京（みやこ）の山寺 なぜ人は山にのぼるのか」の開催

文学部 考古学・文化遺産専攻 岡 寺 良

京都市考古資料館合同企画展について

京都市及び公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所では、埋蔵文化財の発掘調査や大学等における「研究・教育」の成果を広く市民の皆様にご覧いただくため、2011（平成23）年度から「大学のまち京都・学生のまち京都」の特性を活かした合同企画展を、京都市考古資料館において開催してきました。京都市内にある大学で、考古学・歴史学・文化財・博物館学に関わる学科・専攻・ゼミナールを基本の単位として、京都市考古資料館において合同企画展を開催するというもので、過去にも本学考古学・文化遺産専攻のいくつかのゼミが、本企画展に参画してきました。

2025（令和7）年度には、本学考古学・文化遺産専攻の岡寺良ゼミの学生を中心に、大学サークルの立命館大学考古学研究会の現役・OB（院生）メンバーも加わり、本企画展に参画することとなりました。

企画展「京の山寺」の開催背景

本企画展は、参加した学生を中心に展示の企画・立案・準備・運営を行うもので、まず検討したのは、展示会のテーマでした。参加した学生・院生の中には、OBも含め、考古学研究会のメンバーが多くいました

同会では、2025年3月に長年調査研究を行ってきた松尾山寺遺跡の調査報告書を刊行したばかりでした。松尾山寺遺跡は、京都府西京区の松尾大社の背後にある山中に位置する平安時代の山寺の遺跡で、同会が遺跡を確認する以前は、その詳細がほとんど分かっていなかった遺跡でした。

また、報告書を刊行した学生・院生たちは、同年4月以降、京都府内全域においてオープンデータ化された赤色立体地図を元に、山寺遺跡と考えられる地形を探し出しては現地の踏査を繰り返し、これまで全く知られていなかった古代の山寺の遺跡を数多く発見していました。

これら京都盆地周辺の新たに判明してきた山寺遺跡について、展示会を開催することで、市民のみなさまに広く知っていただくという考えの下、展示テーマを「京都盆地の山寺遺跡」を扱うこととし、展示会名称を「京の山寺 なぜ人は山にのぼるのか」に決定しました。

展示会の概要

本企画展では、京都盆地周辺の山寺遺跡を、時代の流れとともにどのように移り変わっていったのかを採集遺物や、赤色立体図や測量図、現地写真、絵図などであらわされた遺跡を素材として、以下の章立てによって紹介しました。

第1章 山に分け入る僧・聖たち—山寺のおこり—

第2章 洛西の山寺、松尾山寺遺跡



設置作業の様子

第3章 山林修行・山岳宗教と平安京周辺の山寺

第4章 中世の山寺—寺から城へ—

また、デジタル技術を活用した展示手法を検討し、デジタルサイネージに展示資料の三次元映像を上映したほか、三次元データをもとに松尾山寺遺跡の立体模型を作成・展示を行いました。また、よりわかりやすい展示を目指し、壁面一面に京都盆地周辺の航空写真に山寺遺跡の位置を落とした地図を掲示したり、赤色立体地図をより多く掲出し、遺跡の平面構造が把握しやすいようにも配慮しました。さらには、より分かりやすい展示解説を目指した「おたすけパネル」を作成し、見ただけではわかりにくい遺物の詳細な解説を「おたすけキャラ」が解説するという「誰でもわかりやすい」展示も心がけましたし、山寺印や人気投票など、楽しい企画もたくさん実施することができました。

一方で、作成した展示パンフレットは、全16ページという分量ながら、展示終了後も山寺遺跡の研究データとしても活用できるように、展示解説のみならず、各遺跡や遺物の図版や解説をふんだんに載せるようにつとめました。無料頒布ということもあり、会期半ばでパンフレットは品切れとなる好評をいただきました。

なお、会期は2025年12月13日（金）～2026年1月25日（日）で、来館者は3,072名を数えました。

関連イベントの実施

会期中には、展示に関連したイベントも、以下の通り開催しました。

- ① 展示解説「京の山寺展のすべて」 展示を企画した学生による展示解説
12月13, 20, 27日、1月10, 24, 25日 いずれも10:00～12:00
- ② オープニングトーク「松尾山寺について語りたい!!」 松尾山寺遺跡を調査した学生による解説講座
12月13日（土）14:00～16:00
- ③ 開催記念シンポジウム「京の山寺—松尾山寺と京洛の山寺—」
12月21日（日）13:00～17:00（会場：立命館大学衣笠キャンパス以学館101ホール）
講師：梶川敏夫氏（元京都市考古資料館館長）、藤岡英礼氏（栗東市教育委員会）
岡寺 良（立命館大学文学部）、岡村隆洋・手嶋響紀・岩撫遥（立命館大学大学院生）
- ④ 体験講座「古代の硯で書道体験」（午前）・「瓦の拓本体験」（午後） 1月10日（土）

おわりに

今回の合同展覧会は、テーマおよび名称を2025年春に決定したのち、展示の章立ての決定、展示資料の選定、展示パネルの原稿作成、展示パンフレットの執筆、展示資料の写真撮影など、京都市考古資料館の学芸員の方々や岡寺の指導・協力を得ながら、夏から秋にかけて実施しました。参加した学生・院生にとっては実際の現場経験を主体的に積むことができた初めてかつ貴重な経験となったことは言うまでもないでしょう。

最後に本企画展の展示資料所蔵者のみなさま、本企画実施の機会を与您いただいた京都市考古資料館、（公財）京都市埋蔵文化財研究所ほか関係機関の皆様方に篤くお礼申し上げます。



学生参加メンバー（シンポジウム後）

茶道資料館での実習を通して学んだこと

文学部 日本文学専攻 野々口愛深

この度、7月9日から8月22日までの5日間、茶道資料館において学芸員館園実習に参加した。本実習は、大学での座学で得た知識を、実際の美術館運営という多角的な側面から実践的に学ぶ貴重な機会であった。本稿では、実習で得られた具体的な学びと、学芸員という専門職の魅力と課題、そして今後の展望について考察する。

今回の実習は、広報から作品取り扱い、来館者対応に至るまで、多岐にわたる内容で構成されていた。まず、展覧会広報についての講義では、パンフレットやポスターの制作、メディア対応、そして集客を促すための工夫など、普段来館者として見ている活動の裏側に多くの戦略と苦労があることを知った。単に「作品を見せる」のではなく、「なぜこの作品を見るべきか」を伝える広報の役割は、学芸員の重要な業務の一つであると認識した。

次に、陶磁器、茶杓、茶釜といった茶道具の取り扱い実習は、学芸員としての責任の重さを痛感する時間であった。巻ダンボールとフェルトを敷いた机で、一つひとつの作品の分量や状態を丁寧に記録する作業は、作品の価値を正確に後世に伝えるための基本であり、細部にわたる注意力が求められることを学んだ。特に、茶入を包む仕覆や、箱を結ぶ真田紐の結び方には、それぞれに意味があり、単なる道具の管理にとどまらない、文化的な背景があることを体感した。また、作品の取り扱いにおけるマニュアルの存在意義を深く理解した。学芸員には、作品の歴史的背景や美術的価値を研究する研究者としての側面があるが、同時に、その作品を安全に、そして確実に次の世代に引き継ぐための技術者としての側面も求められる。茶釜の真田紐の結び方を間違えてしまった経験は、知識だけでなく、実践において求められる正確性を改めて認識するきっかけとなった。学芸員が単なる知的な探求者ではなく、細かな手作業にも熟練した職人的な技術を持つ必要があることを知った。

そして、実習中には学芸員としての領域を超え、司書の方々に今日庵文庫で講義をしていただいた。今日庵文庫は、茶道に関する膨大な文献、古文書、そして書籍類を収蔵しており、茶道研究の貴重な拠点となっている。今日庵文庫は現在も茶道に関する図書の収集を続けており、新たにOPACに加わる和本のデータ入力作業に携わる機会をいただけた。質疑応答の中で、収集した本は、挟み込みなども含めて購入時の状態をできるだけ保持するという話を伺った。虫食いや破れなど、本が歩んできた道のりや作成された当時の形を尊重するために、最小限の処置以外は手を加えないという方針に驚いた。学芸員だけでなく司書にも共通する作品を保存・修復しながらどのように後継に繋げていくかという問題は、さらに学ぶ必要があると感じた。茶道具の保存だけでなく、図書資料の保存・展示・収集について学ぶ機会をいただけて、自分が知らなかった領域の学びを得ることができた。

また、夏季展における茶室体験ワークショップの補助作業では、様々な来館者と直接触れ合う機会を得た。乳幼児連れや児童連れなどの幅広い年齢層への対応を通して、年齢や背景の異なる来館者一人ひとりに寄り添い、安全かつ快適な体験を提供することの難しさを知った。学芸員の方が広い視野でワークショップを運営されているお姿を拝見し、一人ひとりと向き合いながら、他の一般の来館者の方々への気配りの仕方を学んだ。また、他の実習生とあらかじめ自身の役割を決めておいたが、不測の事態に連携して取り組むことの難しさと、お互いを見てサポートし合いながら行動することの重要性を再認識することができた。

最終日での実習の集大成として行った「茶道具の展示方法の特性について」の発表は、これまでの学びを統合的に組み合わせた新たな提案と現在の課題を深く理解し考える時間となった。実習生合計4人を2つのグループに分けてプレゼンテーションを作り発表を行った。私たちのチームは、従来の「名品を拝見する」静的な展示から、来館者の五感を刺激する「動的な展示」への転換をテーマに、「Tea of The Modern Style」というドリームプランを作りながら、その中での新たな茶道具の展示方法について提案した。茶道が大切にする日本の四季への理解をさらに深めるため、二十四節気をコンセプトに、ガラスやステンレスといった現代的な素材と伝統的な茶道具を組み合わせることで、茶道に遠い人から師範の方々にまで新たな茶会のスタイルを提案できるような展示方法を考案した。

発表後の質疑応答と講評は、非常に有益な時間であった。学芸員が直面する現実的な課題を深く考えるきっかけとなったと感じている。例えば、上村さんが指摘した茶道人口の減少と職人不足は、日本の伝統文化の継承に関わる深刻な問題である。これは、博物館が単なる過去の遺物を展示する場所ではなく、現代社会の課題に対し、積極的な役割を担うべきであることを示唆している。また、北井さんがおっしゃった展示方法における耐震・免震問題の指摘も、学芸員業務の難しさを浮き彫りにした。作品を安全に展示するためには、ケースや台の制約に大きく囚われてしまう。さらに、IPMという害虫対策は、元来の駆除ではなく、対策を持ってして作品を守るという方針があり、茶道資料館はその難しさに直面している。この現実的な制約の中で、いかにして魅力的な展示空間を創出するかは、学芸員に求められる創造力と問題解決能力の試金石である。さらに、ワークショップの運営における予算や人員の確保、そして外国人観光客への翻訳といった、グローバル化時代における新たな課題にも向き合わなければならない。これらの課題は、今ある知識だけでは解決できない、実践的な知恵と経験が求められることを示しているだろう。

今回の実習は、学芸員という専門職をより深く理解する貴重な第一歩となった。単に歴史的な知識を蓄積するだけでなく、それをどう表現し、どう伝えるかという、実践的なスキルが不可欠であることを学んだ。今後は、以下の課題に取り組んでいきたいと考えている。

第一に、専門性の深化と多角的な視点の両立である。研究者として特定の分野を深く掘り下げる一方で、広報や教育普及といった多様な業務を円滑に遂行するための幅広い知識とスキルを身につける必要がある。今回の実習で得た経験を基に、茶道史や美術史の研究を続けながら、現代社会のニーズに応える展示や企画を立案する力を養いたい。博物館の展示室が、来館者にとって単なる知識を得る場ではなく、新たな発見や感動を得る「学びの場」となるように貢献していきたい。

第二に、日本文化の「共生」と「変容」を促すことである。茶道人口の減少という課題に対し、日本文化を単に「尊いもの」として捉えるのではなく、日々の暮らしに自然に取り入れ、共に変化していくものとして捉える視点を持ちたい。私たちが提案したモダンスタイル茶道のように、伝統と革新を融合させることで、新たな層の来館者を呼び込み、茶道具の持つ文化的価値を再発見する機会を提供できるのではないかと考えている。そのためには、SNSやデジタル技術を駆使した新しい広報手法にも積極的に挑戦していく必要があるだろう。

第三に、実践的な問題解決能力の向上である。今回の実習で直面した耐震・免震問題や、ワークショップの運営課題は、机上の知識だけでは解決できない。今後は、これらの課題に対し、具体的な解決策を提案できる力を養うため、博物館の運営や経営に関する知識も積極的に学んでいきたい。また、外国人観光客への対応として、AI翻訳技術の活用や、多言語対応の展示解説など、テクノロジーを活用したソリューションも探求していく必要があると感じた。

結びに、この実習は学芸員という職業を、現実的な目標へと変える非常に有意義な経験となった。将来、これらの課題に真摯に取り組み、文化を継承し、創造する一員となれるよう、今後も学問と実践の両面から研鑽を積んでいきたい。

お知らせ

・2026年4月採用予定

佐賀県

(文学研究科 行動文化情報学専攻 考古学・文化遺産専修2回生)

和歌山県教育委員会

(文学部 人文学科 考古学・文化遺産専攻 2026年3月卒業)

- ・2025年4月から、日本史研究学域 考古学・文化遺産専攻に、中村 豊 教授が着任しました。博物館実習の授業を担当いたします。

本学学芸員課程修了の皆様

文化財関係業務への就職・転職・勤務・その他異動の際には、お手数をおかけしますが、奥付のメールにご一報下さいますよう、よろしくお願いいたします

学芸員課程報告

2025年度博物館実習

大学指定実習館一覧 (13館、14名)				
地域	施設名	実習期間	日数	人数
京都府	京都大学総合博物館	8/10、9/1～9/4	5日間	1名
	京都市歴史資料館	8/26～8/30	5日間	1名
	京都市考古資料館	9/9～9/13	5日間	1名
	霊山歴史館	9/2～9/6	5日間	1名
	亀岡市文化資料館	8/26～8/31	6日間	2名
	宇治市歴史資料館	8/26～8/30	5日間	1名
大阪府	大阪府立弥生文化博物館	7/23～7/27	5日間	1名
	大阪歴史博物館	8/18～8/22	5日間	1名
	堺市博物館	8/5～8/8、8/11	5日間	1名
	大阪城天守閣	8/18～8/22	5日間	1名
滋賀県	滋賀県立美術館	8/25～8/29	5日間	1名
兵庫県	神戸市立博物館	8/26～8/30	5日間	1名
	白鶴美術館	8/16、8/23、8/30、9/6、9/13、9/27、10/5、10/12、10/19	9日間	1名

地方実習館一覧 (31 館・33 名)

地域	施設名	実習期間	日数	人数
埼玉県	埼玉県立歴史と民俗の博物館	6/18～6/20、6/24～6/26	6日間	1名
新潟県	新潟県立歴史博物館	9/22～10/2	10日間	1名
富山県	立山博物館	8/19～8/22、8/26～8/29	8日間	1名
石川県	石川県立歴史博物館	8/20～8/22、8/25～8/27	6日間	2名
長野県	飯田市美術博物館	8/21～8/24、8/26～8/31、9/2、9/3	12日間	1名
長野県	松本市立博物館	9/8～9/12	5日間	1名
岐阜県	岐阜市歴史博物館	8/20～8/22、8/26～8/28	6日間	1名
静岡県	島田市博物館	8/19～8/23	5日間	1名
静岡県	浜松市博物館	8/26～8/30	5日間	1名
愛知県	熱田神宮宝物館	8/23～8/27	5日間	1名
愛知県	安城市歴史博物館	7/30～8/1、8/5～8/7	6日間	1名
愛知県	とこなめ陶の森資料館	8/19～8/23	5日間	1名
愛知県	豊田市博物館	8/26～8/30	5日間	1名
愛知県	名古屋市博物館	8/18～8/22	5日間	1名
愛知県	博物館 明治村	10/29～11/2、11/4、11/5	7日間	2名
三重県	三重県総合博物館	8/21、8/22、8/24～8/26	5日間	1名
京都府	京都鉄道博物館	8/25、8/26、8/28～8/30	5日間	1名
京都府	京都府京都文化博物館	8/25～8/29	5日間	1名
京都府	茶道資料館	7/9、7/30、8/6、8/20、8/22	5日間	1名
京都府	京都府立山城郷土資料館	7/29～8/2	5日間	1名
兵庫県	芦屋市谷崎潤一郎記念館	8/26～8/30	5日間	1名
兵庫県	神戸文学館	9/8、9/9、9/11～9/13	5日間	1名
兵庫県	兵庫県立考古博物館	8/6～8/10	5日間	1名
奈良県	奈良県立橿原考古学研究所附属博物館	8/19～8/23	5日間	1名
和歌山県	和歌山県立博物館	8/5～8/10	6日間	1名
岡山県	倉敷考古館	8/6～8/10	5日間	1名
愛媛県	愛媛県歴史文化博物館	8/19～8/24	6日間	1名
愛媛県	松山市考古館	8/5～8/9	5日間	1名
高知県	高知県立美術館	8/20～8/24	5日間	1名
高知県	高知城歴史博物館	8/20～8/23、8/25～8/28	8日間	1名
福岡県	福岡市博物館	8/20～8/22、8/25～8/28	7日間	1名

七尾市教育委員会スポーツ・文化課文化財復旧保全対策室に勤務して

立花 唯翔(主事・学芸員)

石川県七尾市は能登半島の中央部、自然豊かな七尾湾に面した人口約4万5千人の市で、2004（平成16）年に4市町（旧七尾市・田鶴浜町・中島町・能登島町）の合併によって誕生しました。古来より能登の中心地として栄えた当市には古墳・古代遺跡・城跡などが各所に立地します。蝦夷須首穴古墳（国史跡）をはじめとする七尾湾沿岸の古墳群や、古代能登国の政治の中心地であった能登国府関連遺跡群と能登国分寺跡（国史跡）、能登畠山氏の居城として繁栄した戦国屈指の山城である七尾城跡（国史跡）、市街地に点在する歴史的建造物など様々な文化財が能登の中心地として繁栄した歴史を物語っています。しかし、2024（令和6）年1月1日16時10分に発生した令和6年能登半島地震で、当市は震度6強の揺れに見舞われ、七尾城跡の石垣の崩落や市内の歴史的建造物の被災などの市内の文化財に甚大な被害が発生しました。

私が勤務する七尾市教育委員会スポーツ・文化課文化財復旧保全対策室は、市内の文化財の保護・活用を担う教育委員会内の一組織であり、埋蔵文化財の試掘調査や文化財施設の管理などのほか、被災文化財の復旧に向けた業務を行っています。本稿では、私が携わっている文化財の復旧に係る仕事について紹介します。

本題に入る前に、私自身の略歴を紹介しますと、私は学生時代に考古学を専攻する過程で、文化財防災に関する講義を受講し、博物館実習で文化財をとおした災害復興の在り方などを学ぶ機会がありました。そうした中、大学院1回生の冬に令和6年能登半島地震が発生し、被災地の実情に触れる中で、被災した文化財の復旧から「能登」の復興に携わりたいと考え、2025（令和7）年に入庁し、現在に至ります。

話を戻し、まず市内文化財の復旧に係る仕事について紹介したいと思います。文化財の復旧に係る仕事として、令和7年の秋には七尾城跡の災害復旧に係る発掘調査などに携わりました。この業務は史跡の災害復旧にあたり、市内を代表する文化財、そして観光地である七尾城跡を適切な形で守り、地域の復興につなげていくために不可欠なものであり、調査で得られた知見をもとに史跡の保護と、七尾城跡の新たな歴史的価値の創出につなげていきたいと思っています。また、その他の業務として文化財レスキューにも携わっています。文化財レスキューは地域にとって重要な被災文化財の救出・保管などを行うものであり、国立文化財機構文化財防災センターとの協力を経て所有者への資料返却前提で実施するものと、資料を市に寄贈することを前提で実施される七尾市独自のものがあります。文化財レスキューで救出される資料は社寺の天井画や仏像、棟札のほか、地域の歴史に深く関わりのある古文書、考古資料、絵画など多岐に及びます。私が参加した活動の中で特に印象に残っているのは、地元出身の昭和時代の横綱「輪島関」の関連資料の搬出と目録作成作業です。当市出身の輪島関（1948～2018）は1970年代の横綱として著名な力士ですが、実家が震災によって被災し、建物の公費解体が迫る中、遺品の行方が注目されていました。地元の要望により七尾市が資料を保管することとなり、約550点の資料を目録化しました。資料は大学や大相撲の大会の表彰状やトロフィーのほか、地域のスポーツ振興に係る文書類など、郷土の偉人の人柄や地域のスポーツ・文化振興の歴史を評価していくうえで非常に重要な資料でした。なお、この輪島関の関連資料は地元の小学校に一括保管され、そのうちの一部は在校児童に向けて展示しています。



史跡七尾城跡の発掘調査現場



輪島関関連資料の展示風景

文化財の復旧は文化財をもとの姿に戻すだけでなく、文化財との対話をとおして見つけ出した底力を復興につなげることも大切な視点です。文化財は地域の人々の熱意の結果、現代まで大切に残されてきたものであり、文化財をとおして人と人がつながっています。人々がつないできた地域の営みを文化財から読み取り、地域の歴史を見つめなおすことは、地域の歴史的価値を創出し、やがて復興の原動力へと成長します。これから文化財に関わる仕事に携わる皆様には、文化財を現代までつないできた人々の想いを心に刻み、文化財との対話をとおして地域の歴史を読み取り、活用する姿勢を大切にいただければと思います。

震災から2年が経過し、能登の風景は少しずつ変化し始めています。復旧はまだ道半ばですが、文化財の復旧をとおして、地域の歴史を再発見することはやりがいを感じます。文化財の復旧をとおして地域の豊かさを創出し、七尾そして能登の復興を支えていけるようこれからも邁進したいと思います。

2025年 立命館大学大学院文学研究科考古学・文化遺産専修博士前期課程修了